快挙 創部初の5位


相手を抑え込む田宮

全日本学生柔道体重別団体優勝大会＝10月24～25日、兵庫県・尼崎ベイコム総合体育館

柔道部が創部以来初のベスト8入りを果たし、5位に入賞した。

部員、監督が声をそろえて「印象に残った」というのは山学大との2回戦。66kg級の西山倖生（経済4・桐蔭学園高）を欠き、關龍聖監督も「厳しい戦いになると考えていた」と語る。先鋒の田宮令都（法4・作新学院高）が大外刈りで一本勝ち。迎えた大将戦では、主将の鎌倉啓太郎（経営4・習志野高）が優勢に試合を運び、最後は相手選手に三つ目の指導が入り、3―3ながら内容勝ちで3回戦にコマを進めた。

ベスト8入りをかけた3回戦は法大と対戦。試合前、鎌倉が「今まではベスト8に届かず、悔しい状況が続いていた。それを良しとせず、新しい俺たちで行くぞ」と部員を鼓舞した。

次鋒・松井達也（文3・東海大学付属札幌高）、中堅・川村拓也（文3・盛岡南高）が一本勝ちするも2―2で再び大将戦へ。勝負を託された田宮は、鎌倉からの「やり切るぞ」の掛け声を後押しに、背負い投げを仕掛けて有効を獲得。チームに勝利をもたらした。

続く準々決勝で敗れたものの、大会を通して果敢に攻める姿勢を見せた。

關監督は「大黒柱の鎌倉に頼りきるのではなく、全員で戦う意識を持っていた。その成果が表れた大会だった」と振り返った。

坂本晃一郎（商4・高知高）は「苦しい時期を乗り越え、結果を残せたのは応援してくれた皆さんのおかげです」と感謝を口にした。（河野楓・文2＝写真も）

軍司 500メートル4位

地元開催のW杯で上位狙う

全日本スピードスケート距離別選手権大会＝10月23～25日、長野県・エムウェーブ


新フォームで初戦を戦った軍司

ワールドカップ（W杯）前半戦の代表選考を兼ねたシーズン開幕戦。軍司一冴（経営4・白樺学園高）が男子500㍍で4位に入り、W杯の日本代表に選ばれた。

オフシーズンはフォームを一から見直し、一歩でも長く氷を捉えることを目標に、改善に取り組んできた。今大会の記録は34秒96で3位とは0秒01差。フォームが安定しない部分もあり、「満足のいく内容ではなかった」と課題を口にした。

W杯第2戦は地元の北海道帯広市で行われる。「2年前のW杯では思うような成績を残せなかった。恥ずかしくないレースをすることが目標。過去の自分を超えるレースがしたい」と上位進出を誓った。

また、ジュニア派遣選手選考部門では、長岡歩太（経営1・白樺学園高）が1500㍍で2位、3000㍍で3位となった。（君嶋悠樹・経済3）

松岡＆オララ・ヴァントフルット号 初優勝

障害馬術競技


笑顔の松岡とオララ・ヴァントフルット号

全日本学生馬術大会＝10月27日～11月1日、世田谷区・JRA馬事公苑

障害馬術、馬場馬術、総合馬術の3競技が行われた本大会。松岡凛桜（文2・三田松聖高）とオララ・ヴァントフルット号ペアが障害馬術で優勝し、初の学生日本一に輝いた。

第1回走行、第2回走行をノーミスで通過すると、サドンデスとなったジャンプオフでもミスなく走り切った。松岡は「3位となった昨年もそうだったが、馬に助けられた。楽しい走行ができた」とパートナーのオララ・ヴァントフルット号への感謝を口にした。

関東学生に続いて二つ目のタイトルを獲得した松岡。「ジャンプではなくフラットワークをしっかり練習したのが良かった。コーチや先輩からのアドバイスのおかげです。連覇を目指します」と力強く語った。（佐藤佑樹・経済3）

最短で1部復帰

インカレ出場獲得

関東大学バスケットボールリーグ戦入れ替え戦＝11月3～5日、渋谷区・代々木第二体育館


入れ替え戦第3戦でチームハイの22得点5アシストと活躍した後藤

2部降格から1年。専大が最短での1部復帰を決め、12月の全日本大学選手権の出場権を獲得した。

リーグ戦を17勝5敗の2位で終え、入れ替え戦では1部11位の国士舘大と対戦した。1勝1敗で迎えた第3戦。残り24秒でアピアパトリック眞（商3・福岡第一高）が値千金の逆転シュートを決めると、最後は後藤由（商2・美濃加茂高）がフリースローを沈め、74―72で逃げ切った。

勝利の瞬間、会場は歓喜に沸いた。スタンドにはOBや保護者らが駆け付け、体育会各部の仲間も最前列から声援を送った。主将の野崎稜太（文4・近畿大学附属高）は「大学バスケの聖地がホームコートのようだった。本当に感謝を伝えたい」と支えてくれた人たちへの思いを語った。（君嶋＝写真も）

3位に終わる

東都大学野球秋季リーグ戦（2部）＝9月9日～10月29日、神奈川県・等々力球場ほか

7勝6敗・勝ち点3の3位で幕を閉じた。

開幕カードの東農大戦を連勝で飾るなど終盤まで首位争いを展開した専大。第5週は1位で並ぶ駒大との直接対決で、勝ち点を獲得すれば優勝が決まる状況だったが、初戦を0―1、第2戦も1―2といずれも1点差で惜敗し、春秋連覇を逃した。

主将の工藤翔斗（経営4・大阪桐蔭高）は「後輩たちに1部でプレーをさせてあげたかった。本当に悔しい」と無念さをにじませた。（知地泰雅・文4）

ボクシング部 創部100周年祝う

体育会ボクシング部が創部100周年を迎え、記念式典が10月24日、都内で開催された。

卒業生や現役部員をはじめ、馬場杉夫学長、松木健一理事長ら約130人が出席し、節目の年を祝った。

式典では、世界王者として活躍した大橋秀行さん（校友会推薦会員）や山中慎介さん（平17商）が祝辞を述べたほか、パリオリンピックに出場した原田周大さん（法4）に記念品が贈呈された。

出席者はボクシング部の歴史と伝統を振り返りながら交流を深めた。


あいさつするボクシング部OB会の萩野谷詠昨会長

ZOOM UP ズームアップ！

ボディビル部

KATAI RENTO

片井 蓮仁（経営3・野沢南高）

全日本学生2位 復活のシーズン



ボディビル部の片井蓮仁が、全日本学生ボディビル選手権大会で2位に入った。関東学生ボディビル選手権大会でも2位となり、今季を「復活のシーズン」と捉える。

2023年の全国高校生ボディビル選手権を制し、高校日本一として入学。しかし1、2年次は全日本学生に出られなかった。苦しい時にも支えになったのはジムの先輩や友人など、周囲の人たちの存在だった。

「ようやく3年目で戻ってこられた」という大舞台で、全身の筋肉量と体に刻まれたカット、得意のポージングで輝きを放った。減量期は外食も遊びも控え、きつい時は「支えてくれた人の顔が浮かび、怠けている場合じゃないと思えた」と明かす。全日本学生を終え、ようやくファミレスでテーブルに載り切らないほどの料理を頼んだ。

ボディビルについて「個人競技と思われがちだが、団体スポーツの側面もある」と片井。ステージの両端から飛ぶ、割れんばかりの仲間の声援がポージングの修正指示になり、地鳴りのような歓声が最後のひと踏ん張りを支える。「観客と選手が一つのものを作り上げる一体感が一番の魅力」と語る。

次の目標は関東学生、全日本学生の優勝と団体入賞だ。「とにかく食べて、体を大きくして、筋トレする」と、冬のオフを体づくりに充てる。（君嶋）